第二話＜夢はハリウッド？＞

　それより遡ること半年ほど前―、
事務所からの仕事が途絶えがちで､月のギャラが殆ど無い日が続いていたそんなある日のこと、事務所の先輩が、家賃１万円のアパートの部屋へ突然訪ねてきてこう告げました。

「…T プロが日米合作の映画を撮ることになって、そこに登場する白いゴリラのオーデションがあるからおまえ受けてみろ！」―それは“T.I.A”という白いゴリラをめぐる話で、撮影はバミューダという島でのロケだという。おまけに出来上がった作品は日米で放映される予定である…と。

　中学生の頃から夢見た映画の中のアクションスターへの階段**…それがいきなり**バーンと用意されたように感じました。
　そしてオーデションの当日、監督並びにプロデューサーそれにゴリラ製作者など数名の強面の審査員の前で自分の得意技を見てもらい質問を受けそれに答える。
　数時間後、二名の名前が呼ばれ、そこにわたしの名もありました。最終的な合格者は後日発表されることになりそれからの数日というもの、我ここにあらず…隣の人は何する人ぞ…バイト先のその手に持ったトレンチも危うく落としそうな毎日だったと思う。
　こうして結果発表のその日の夕刻、決められた時間に明日のスケジュールの確認の電話を入れる。……なかなか電話が繋がらなかったように想い出す。暫くあって「あっ、瀬﨑くん…おめでとうー！受かったよ」、、、そのあとの言葉は殆ど聞こえてはいなかったのだろう…何も覚えてはいない。

あー…夢のハリウッドの舞台が今、自分の足元に用意されようとしている…
とかなんとか、とにかく足元が空高く持ち上がっていくのを覚えている。

　それから上野動物園のゴリラの檻の前で過ごす日々があって数ヵ月後、わたしは羽田空港にやって来ておりました。
　…ここは四・五年前、高校に入学して間もない十六歳の夏に、九州の田舎の町から大都会に憧れて家出してやってきた、その場所でした。

「いつか、ここから飛び立って世界中を巡る仕事がしたい！」と誓った十六歳のわたしは、このとき二十歳になって同じ場所に立っていました。